九、戦後の復興から成長の時代

1　戦後の生活

終戦とともに　一九四五年（昭和二十）八月十五日、人々はラジオや口づてから終戦を知りました。「戦争に勝つまでは」と、あらゆる苦しみをがまんしてきた人たちは、ただぼう然となりました。まもなくアメリカ軍を中心とする占領軍が、各地に進駐するようになりました。大野は、福井へ来た分遣隊の取り締まりを受けました。六呂師の兵舎には、戦争中アメリカ軍の将校が捕虜として収容されていましたが、戦争が終わって解放されると村や町に現れたので、人々はびっくりして隠れるなどしました。しかし、彼らは平静に行動してくれたので、大野は平穏でした。やがて、戦地へ赴いていた人たちや、軍需工場へ行っていた人たちも次々と帰ってきました。

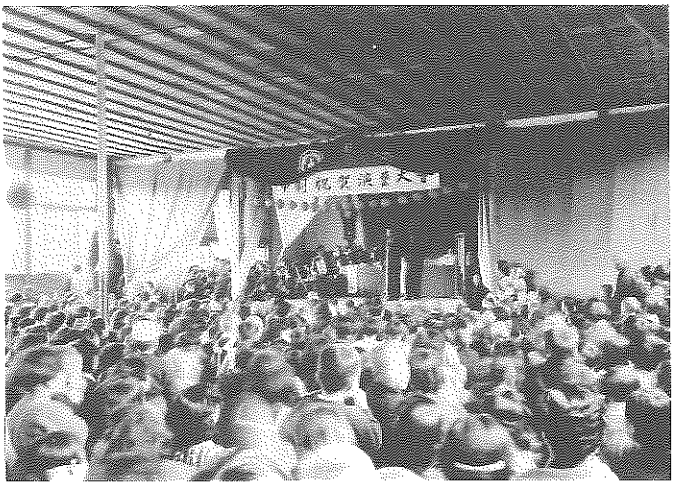
食糧の不足　空襲によって国内の生産や交通の施設が破壊され、肥料と労力の不足から田畑も荒れていたので、物資や食糧は非常に不足しました。このためインフレーションはいっそう進み、戦争は終わったものの人々の生活は苦しいまま

でした。どの家庭も、粥や、米の量をうかすため大豆や野菜が入ったまぜごはんなどでがまんしなければなりませんでした。学校でも弁当を持ってこられない子どもが各クラスに何人かおり、ときには弁当がなくなったりもしました。進駐軍の供出命令は強制的で、農家の人たちが食べる米もいったん集められ、その後配給させられました。やがて食料を補うために小麦粉などが配給されるようになりました。

苦難の道　住民の間では、物を手に入れるため物々交換などをおこない、中にはヤミ値で品物を手に入れることもしました。人々の心も荒れすさんだように見えました。学校のガラスが一夜にごっそりと盗まれたり、浴場では、はき物や衣類などが持ち去られたりしました。そのような中で、占領政策は次々と出され強行されました。役所は戦前の書類を出して、戦争に関係したものはいっさい焼き捨てました。学校の奉安庫が壊され、天皇の写真をはずすなど軍国主義的なものは取り除かれました。このようなときにあって、一九四七年（昭和二十二）十月、国民を激励するために天皇の巡幸がおこなわれました。混乱と失望の中にあった人々は、巡幸によって復興への決意をいっそう固くしました。

こうした敗戦の苦しみのなか三、四年を経て、国民の忍耐と連合国軍総司令部

の指導によってインフレーションはおさまり世の中も落ちつきました。



市制実施を祝う演芸大会（昭和29年）

2　大野市の誕生

新しい市政の出発　日本国憲法が制定されると、国の政治のしくみもかわったので、人々は新しい制度にとまどいを感じながらも、しだいに自由と民主主義の精神を受け入れていきました。一九五一年（昭和二十六）、下庄村が町制をしきましたが、一九五四年（昭和二十九）七月一日に、大野町・下庄町・上庄村・富田村・小山村・乾側村・五箇村・阪谷村が合併し、大野市が誕生しました。八月十日には、斉藤重雄市長が初代市長として選ばれました。市長選の翌年には、新しく市議会

の議員三十名が決まり、市政がスタートしました。

新しく誕生した大野市は広い地域にわたるため、総合的な計画のもとに産業や経済の発展をはかることが、大切になりました。

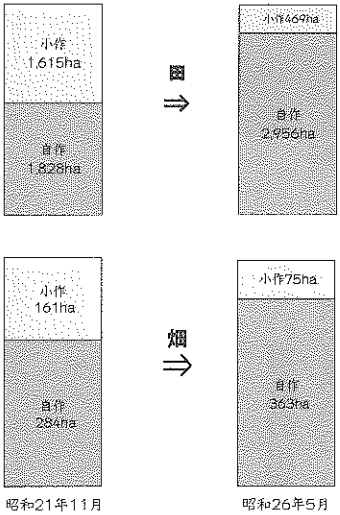
3 産業の復興と成長

かわる農村 農村の人たちは、戦時中、働き手を戦場に送り出し、乏しい肥料で食糧増産にがんばってきました。太平洋戦争後は、台湾や朝鮮からの米の輸入がなくなり、国内では食糧が不足しました。そこで、国は未開発の土地の開

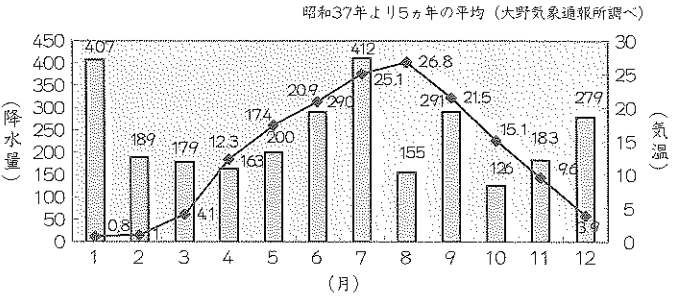
（『福井県史』より）

年	開拓組合	戸数（戸）	人口（人）	面積（ha）
昭和 20	新田野	15	51	45.5
20	塚原	56	185	169.0
21	栗原	10	42	55.0
22	富田	22	86	169.0
23	六呂師	12	35	231.0
23	中保	6	28	21.0
26	石徹白	15	72	140.0
27	森山	5	17	14.0
28	平家平	30	153	900.0

戦後の入植のようす（旧『大野のあゆみ』より）



大野市の農地改革
（旧『大野のあゆみ』より）



月平均気温と降水量（旧『大野のあゆみ』より）

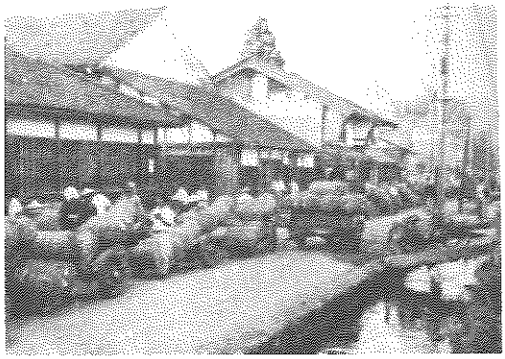
拓をすすめました。海外からの引きあげ者や戦災を受けた人たちに、開拓地を分け増産をはかりました。入植して鍬をふるった人たちの中には、激しい労働のわりに収入は上がらず生活が苦しいままだったので、開拓をやめる人たちも現れました。

戦後の農村を大きくかえたのは農地改革でした。地主の持っていた農地を国が買い上げ、小作人（土地を持たない人）に安い値段で売り渡しました。その結果自作農家が増え、小作料も国で決められたので非常に安くなりました。自作農となった農民の喜びは大きく働く意欲もわき、その結果は増産となってあらわれました。

早場米づくり　大野盆地は、冬の気温が低く夏は反対に高温となる内陸的な気候で、稲作には良い条件が整っています。

一九五五年（昭和三十）ごろには稲作の技術がすすみ、保温折衷苗しろづくりがおこなわれるようになりました。今までの苗づくりは四月に入るとすぐ種もみ

をおろし、まだ水の冷たい田の中に入って苗しろづくりを始めていました。保温折衷苗しろでは、温床紙やビニールで苗を覆います。五月になれば田植えが始まり、八月の終わりから九月にかけては収穫が続き、供出の車があちこちで見られました。



米の供出（下庄農協倉庫付近）
（旧『大野のあゆみ』より）

早場米づくりは、政府の奨励金もついて風水害を避けることもでき、それに余った労力は現金収入の仕事にまわすこともできるため、盛んにおこなわれました。その結果、市全体の米の収穫高は、約一万八千トンになりました。

特産物と畜産　米作だけでは収入が限られてしまうので、農家の人たちはいろいろと作物を工夫し、利益のあがる農家にかえようとしていました。米以外の作物もつくるようになり、富田地区のにんじん、上庄地区のチューリップと

（市町村統計）

種類＼年次	昭和27年	30年	37年	40年
乳牛	38 戸 44 頭	82 戸 89 頭	285 戸 472 頭	135 戸 413 頭
和牛	- -	18 戸 20 頭	1,064 戸 1,169 頭	370 戸 493 頭
豚	35 戸 56 頭	35 戸 40 頭	20 戸 75 頭	13 戸 188 頭
山羊	58 戸 62 頭	180 戸 180 頭	109 戸 109 頭	26 戸 42 頭
にわとり	1,314 戸 14,402 羽	805 戸 10,810 羽	975 戸 33,083 羽	374 戸 42,406 羽

畜産のようす（旧『大野のあゆみ』より）

にんじん、下庄地区のきゅうり・トマト・なすなどは特産物となりました。また、乾側地区では養鶏をやっている人も多くいました。また小山・阪谷地区では、肉牛を飼って利益をあげようとしました。一九五五年（昭和三十）ごろから乳牛を飼う農家も多くなり、市には酪農組合もできました。

養蚕　戦後、養蚕を営む人は徐々に減っていきました。その原因は、太平洋戦争後ナイロンやビニールなどが発明されて、生糸の需要が減ったためです。それにアメリカ合衆国への輸出も少なくなり、値段も移りかわりが早く安い値が続いたことや、労力がかかるために振るわなくなりました。

桑畑もどんどん掘りおこされ、ほかの畑にかわってしまいました。しかし、阪谷や上庄地区の一部では、蚕を飼っている農家もまだみられました。また、上篠座にあった蚕業試験場では、新しい技術の研究などがいろいろすすめられました。

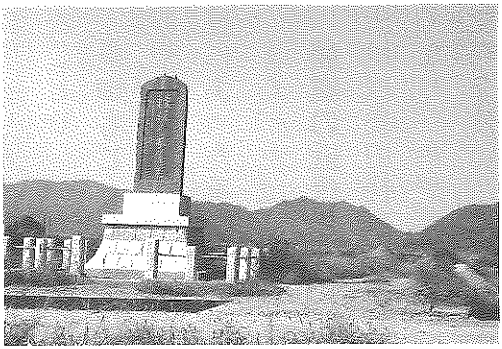
また、たばこは、米についで生産額が多く、県下でも有数の産地でした。

農業の近代化　新しく大野市が誕生してから、用水路や排水路をなおしたり、土地改良の仕事などもどんどんすすめられました。農作業も機械を使うことが多くなり、牛や馬を使った耕作から耕うん機を使う時代になりました。肥料も化学肥料を使い、農薬もよく効くようになりました。こうした農業技術の進歩で生産

は増えていきました。

国では、農村の近代化・合理化をはかるために、一九六一年（昭和三十六）農業基本法を制定し、農業構造改善事業（パイロットファーム）などをおしすすめていきました。市では、下庄・乾側地区の一部ですでにおこなわれていました。

土地の生産性が高まり機械化がすすむことによって、農村は大きくかわってきました。稲作に要する時間が短縮され体力的な負担が軽くなると、多角的な農業経営を試みる農家も増えてきました。



農業構造改善事業（昭和40年代）（下庄地区）

昭和　年　月　日	世帯数	人　口
30. 10. 1.	3,491	11,835
35. 10. 1.	3,356	11,356
40. 10. 1.	3,202	9,667

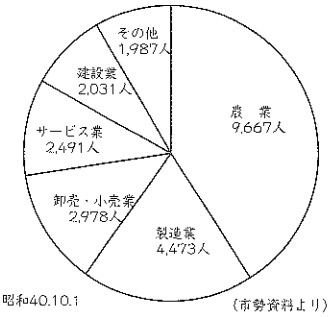
農業人口（旧『大野のあゆみ』より）

一九五九年（昭和三十四）には、大野市青果市場が設けられましたが、この市場で取り扱う農産物の市内の農家からの出荷量は少ないものでした。しかし、昔からのならわしとして、朝早くから近郷の農村の婦人が町の通りを野菜売りに歩いていました。七間通りは、朝市で賑わいを見せ大野の名物となっています。

減っていく農村人口　市内の農業経営規模は、一ヘクタール以下が六十パーセ

ント、一ヘクタール以上が四十パーセントで、県平均より上回っていました。自小作別に見ると、自作が六十パーセントで過半数を占め、純小作は二十六パーセントでした。

しかし昭和三十年代において、農業所得だけでは都市の生活より収入が低いので、どうしても兼業や、出かせぎ・日雇いなどに出る農家も多くなりました。特に出かせぎは昔から続いており、秋のとり入れがすむと関西方面の伏見（京都府）・灘（兵庫県）・奈良の酒屋へ働きに出ました。酒づくりのさしずをする杜氏とよばれる職人として働きました。大きい酒造会社には、四百人あまりも雇われていました。



産業別就業人口
（旧『大野のあゆみ』より）

年次	台数
昭和 29	101
33	1,002
35	1,609
36	1,635
37	1,991
38	2,047
39	2,302
40	2,652

耕うん機使用数
（旧『大野のあゆみ』より）

（市町村統計より）

種別／地区	人力のみ	畜力のみ	畜力・機械力併用	機械力のみ	使用家畜 牛	使用家畜 馬
大野	213	11	94	61	10	95
小山	8	8	248	41	29	228
乾側	18	42	180	16	66	168
下庄	-	1	694	-	55	640
上庄	76	289	719	3	323	701
阪谷	17	93	501	11	128	484
五箇	104	67	6	-	34	39
富田	40	115	567	18	292	402
合計	476	626	3,009	150	937	2,757

畜力・動力機械使用農家数（昭和25年）（旧『大野のあゆみ』より）

よく「三ちゃん農業」といわれるのもこの当時の姿です。冬の間失業保険金をもらう人が、市内で約四千五百人もおり、そのうち半数は近在の農家の人たちでした。

国内の工業生産が増えるにつれて、市内の若い次男・三男たちは、地元より都会へ就職して流れていき、市の農業人口は五パーセント（二百人）あまりも減っていきました。

大野市農業協同組合　農協は、農民が自分たちの農業経営と生活の向上を目指してつくった組合です。組合員が組合の事業を利用することによって、共同の利益を得ることが目的です。市には八つの農協がありましたが、一九六四年（昭和三十九）、上庄農協以外の七つが合併し、大野市農業協同組合が誕生しました。

農協の事業は、大まかに信用・販売・購買・利用・共済・生産指導などに分けられます。いままでにも、有線電話や農集電話をつけたり、特産物や肥料のあっせんをしてきました。また、病虫害の防除などでヘリコプターを使うなど大きな効

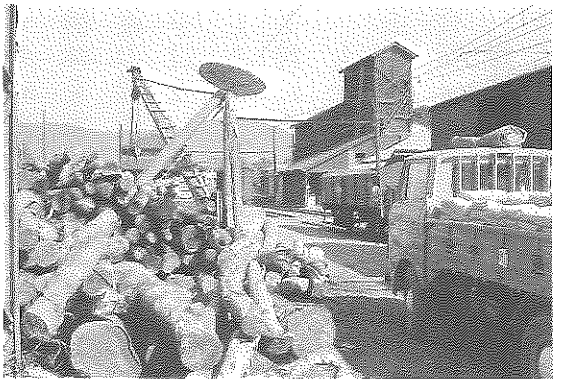
（市町村統計　昭41．2．1現在）

区分 / 規模	0.3ha未満	0.3～0.5	0.5～0.7	0.7～1.0	1.0～1.5	1.5～2	2以上
専業農家	12	32	24	59	110	79	29
兼業農家	300	349	476	879	1,085	471	126
総　数	312	381	500	938	1,195	550	155

専業兼業別農家戸数（旧『大野のあゆみ』より）

果をあげていました。

かわる山村　山村の生活は、山林の中に国有林が多いか私有林が多いかによって違ってきます。農地改革のとき、山林の解放はなかったので、昔のままのならわしが続いていました。わずかな山林しか持たない人たちは、生活を支えるために、森林の労働者となって働きに出るか、炭焼きをしてくらしを立ててきました。



大野口駅の材木の集積のようす（昭和40年代）

一九五五年（昭和三十）ごろから電気や石油、石炭などの燃料が多く使われ出すと、炭焼きでは採算が合わず、年々数が著しく減っていきました。

太平洋戦争中、石油不足を補うため、大野郡に毎年約八十万俵の木炭生産が割り当てられ、木炭用や船舶用材としてブナ・ケヤキなども供出命令を受けて切り倒されました。さらに、戦災復興のため建築用材の伐採が盛んになり、一九五五年（昭和三十）ごろには伐採する木はなくなって山も荒れてきたので、植林が叫ばれるようになりました。そこで県は、福井県林業指導所を設け、よい苗をつくって指導を

すすめました。これとは別に、営林署も上据において毎年数十万本の杉苗を育て植林をすすめてきました。一九五六年（昭和三十一）に、国は森林開発公団（現在の緑資源公団）を設立して植林をすすめました。また、県でも福井県森林公社を設立して、森林組合に植林の事業をさせました。こうして山は緑に姿をかえました。またその他に、黄れん・わさび・しいたけ・なめこなどが山の特産物として特に普及するようになりました。

しかし、交通や文化が発達してくると、山の生活も都会の影響を受けました。山の特産物で収入を増やそうとしてもなかなか難しく、そのため都会に出かせぎに行く人も多くなり、山村の生活は崩れはじめました。

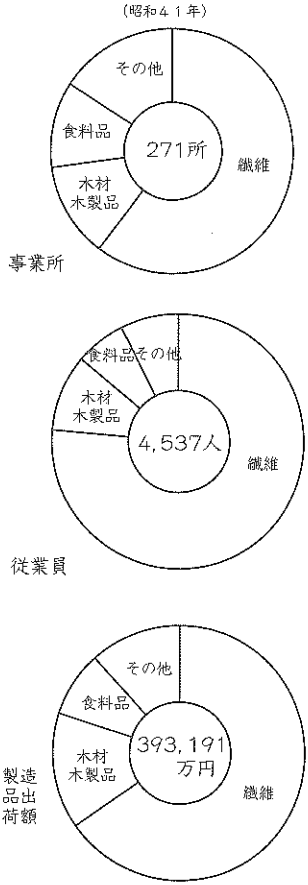
繊維工業の移りかわり　戦争のためがらあきになった機業場も、戦後しばらくは世の中の不安もあり、復興ははかどりませんでしたが、一九四九年（昭和二十二）に、組合員数二十八名で大野織物工業組合が結成されました。さらに、一九五〇年（昭和二十五）繊維の統制がなくなると、需要が高まり工場も増えてきました。

さらに、同年おきた朝鮮戦争をきっかけに国内の工業が発展し、織物生産も多くなりました。織機台数も約二千七百台、従業員は二千百人余りとなり、戦前を

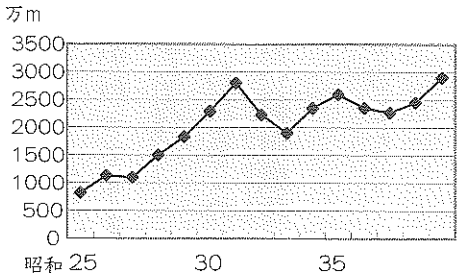
上回りました。

大野の織物は、ねん糸（よりを加えた糸）による薄物が中心で、羽二重、レーヨンの技術はすすんでいました。戦後の工業復興の中でも、繊維工業は長年の技術が生かされ、再び活発な動きを示しました。生産された織物は大部分がアメリカ合衆国やカナダなどの海外に輸出されました。織物業界は活況に沸き、「糸ヘン景気」といわれるほどでした。

人絹、スフの再生繊維にかわって、ナイロンやテトロンなどの合成繊維が国産化されるにつれて、すぐにこれらの新しい技術の研究をおこない、新しい機械を導入し



工業のようす
（旧『大野のあゆみ』より）



大野市の織物生産高（旧『大野のあゆみ』より）

て設備を整えました。合成繊維でつくられる製品もねん糸でつくられる薄物であったことから、転換が無理なくおこなわれました。合成繊維は水分を吸収しないため熱帯地方の生活には合わなかったので、輸出先は以前とかわってきました。約六十パーセントは外国へ、四十パーセントは国内へまわりました。

くもの糸よりも細く、絹よりも美しく、鋼鉄よりも強いといわれるこの合成繊維は全織物生産量の九十パーセントを占め、高級織物や幅の広い輸出織物の産地として全国でも有名になりました。

昭和四十年代に入り、工場数は百十二、織機台数は五千二百台となり、戦前の約二倍となりました。

かわる工場　昭和三十年代後半から、市内の工場では労働力が不足し、県外からの集団就職にも大きく力を入れるようになりました。そのために、寄宿舎などの福利施設を充実し、従業員の待遇改善に努めました。

一時、綿織物などでは、生産が多くなりすぎてデフレーションとなり、県下でも経営の苦しい地域がありましたが、大野市はその影響をまぬがれました。一九六〇年（昭和三十五）から始まった所得倍増計画によって、国も経済の発展をはかりました。

織物組合給食センターの調理室
（旧『大野のあゆみ』より）

織物工場
（旧『大野のあゆみ』より）

輸出に重点をおいて歩んできた市の生産は順調でした。その後、中央の大企業の進出がめざましく、生産競争が激しくなったため、中小企業は安定した方法として、大企業の下請の仕事をするようにかわってきました。大企業の系列化がすすむと、工賃を増やすためにも生産量を増やすことが必要となりました。どの工場も織機を十分に使って、昼夜二交替で仕事をしました。市街にはマイクロバスで従業員を送り迎えする風景が見られました。

大野織物工業協同組合　機業を発展させるためには、業者の共同も大切です。一九四九年（昭和二十四）には、中小企業協同組合法が公布されたのをきっかけに、大野織物工業協同組合に組織を改めました。組合では、織布の糸や材料の取りつぎをしたり、工場が資金を借りる場合その世話もしてきました。また、組合員や従業員のため一九六三年（昭和三十八）給食センターを

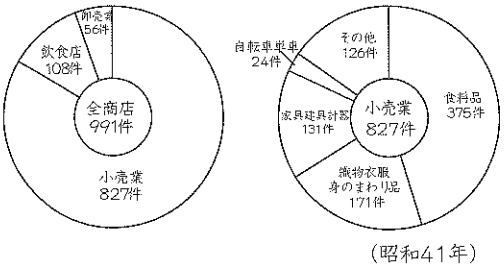
つくり、共同給食ができるようにしました。一日三食、正月を除く年中無休の共同給食の開始です。無駄な手間をはぶいたため経費も安く、栄養も考えてあるので喜ばれていました。

木材工業　繊維工業についで盛んなものが木材工業でした。戦時中は、福井県嶺北木材株式会社として一つにまとめられ、戦後各事業所も増えて三十あまりになり、働く人も四百人以上になりました。製材では、杉・松・ヒノキなどの建築用材をつくり、ケヤキ・ブナ・ナラなどから、枕木・チップ・木管・ベニヤ合板などが生産されました。また、木製品では家具製作も盛んでした。

朝市でにぎわう七間通り（昭和40年代）
（旧『大野のあゆみ』より）

商店街のようす　商業の中心街は、三番通り・七間通り・五番通りでした。三番通りは、京福大野駅前通りであるため、人々の往来も激しく、各種の専門店が軒をつらねていました。七間通りや五番通りは、古くからののれんを持っている商店が多くあり、七間通りは朝市で賑わいました。

昭和三十年代後半から、旧国鉄大野駅前通りがかわってきました。越美北線の開通とともに、新しい通りには、自動車・サービス業・保険会社などができ、スーパーマーケットも現れてきました。駅東には、新しい住宅が立ち並び、人口も増えてきました。市民会館（今の文化会館）では、文化行事などの集まりも多くなりました。



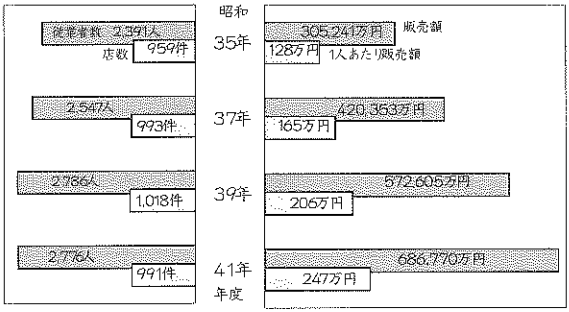
商店の構成（旧『大野のあゆみ』より）

商店の種類では食料品店が全体の半数近くあり、他に織物・衣服・家具店などがありました。仕入れは、食料品・繊維製品・機械金属製品がおもなもので、雑貨品などは京阪神や中京地方からの物が多く、おもに関西方面と結びついていました。市で生産される製品で販売されるものは繊維製品が最も多く、ついで酒・しょう油でした。

酒のおもな原料は米と水で、原料のよしあしがなかば酒の優劣を決めます。大野盆地は昼と夜の寒暖の差が激しいので、酒米をつくるのに適しています。そのうえ、酒米によい品種を選んでつくってきたことから、大野は銘酒の産地として知られました。しかし、戦時中の食糧不足の時、

米を原料とする酒造りは厳しく制限され、それまで郡内に二十戸ばかりあった酒屋は統合されました。一九五五年（昭和三十）の記録によれば、一年間に約三千五百石（約六百三十キロリットル）生産されました。

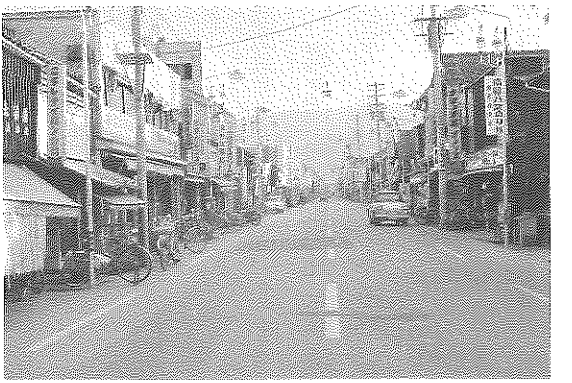
しょうゆは、江戸時代のころから近郷の大豆を材料として製造されてきました。戦時中は、原料不足のため大幅に製造を制限されましたが、戦後は市内の醸造所で生産が続けられています。



商業の移りかわり（旧『大野のあゆみ』より）

かわる商店街　昭和四十年代に入り、商店の数はわずかしか増えていません。経営の規模は、一商店あたり従業員三人程度で、市の人口約四万四千人に対し、二千七百人の従業員数になり、従業員一人に対して十七人の買い物客の割合となりました。二十年前は一人に対して二十五人だったので、商売にとってかなり厳しい時代ともいえました。

越美北線の開通やバス路線の発達、自家用車などが増えたことにより、市民が直接福井へ買い物に出かけたりすることも多くなりました。商店街では店の飾り付け、



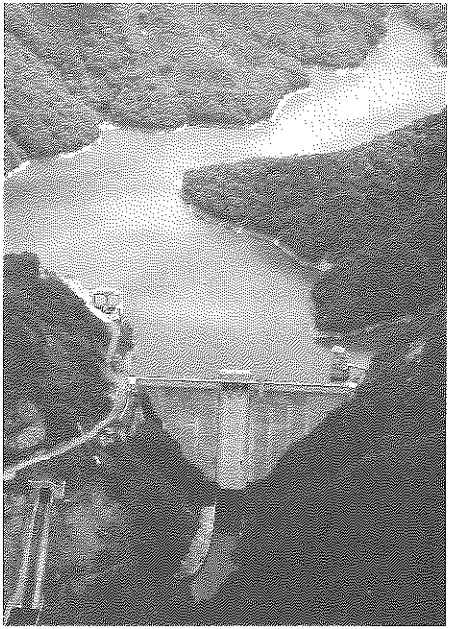
三番通り商店街（昭和40年代）

広告、宣伝、景品つき大売り出し、催しものなどいろいろと工夫をしてきました。また、商業を盛んにするために、専門の講師を招いて店の照明を良くしたり、ショーウインドーの取り付けを指導してもらい、結果として店先は明るく美しくなりました。さらに三番通りや五番通りの商店街などは、ネオン照明が取り付けられました。商売の方法もスーパーマーケット式が多くなり、買い物がしやすいように気を配ってきました。

商業の改善　商業の発展のためには、地元の商店が協力しあい改善への工夫をすることが必要です。各業者の組合と、専門店会の活動やこれを指導している商工会議所、信用金庫の力は大きいものがあります。客の利益と便利をはかるために、全国各地の専門店会と連絡をとったり、有線放送などを設けたり、年間の大きい催しを計画したり活動を着々とすすめてきました。

大野商工会議所は、一九四九年（昭和二十四）、二百八十名の会員で発足しま

したが、その後、大野町の商工会が母体となって市全体の商工会議所に発展し、商工業懇談会を開いて世論を結集したり、観光宣伝など幅広い活動をおこなって、商工業の発展につくしてきました。また、中小商工業者に対して資金を貸すために、一九五一年（昭和二十六）信用金庫がつくられました。一般銀行と同じく、預金のほか国や県からの融資金を預かり、会員のために便宜をはかっています。



笹生川ダム
（写真：福井県笹生川ダム管理事務所提供）

真名川総合開発　県始まって以来の大事業であった真名川総合開発は、一九五三年（昭和二十八）から、四年余りの年月と四十八億円の巨費を使って完成しました。完成するまでにはいくつかの困難がありました。事業を国に認めてもらい、ダムによって水没する集落の補償を解決したり、事業の予算を立てたりすることなどです。また下流でおこる水問題や、売電問題などを円満にすすめることも重

要でした。真名川の上流は、笹生川と雲川にわかれるので、この両方に砂防ダムをつくって水をせきとめました。笹生川に使われたセメントは、四・七万トンにもなりました。できあがった湖は、五千八百万立方メートルもの水をたたえ、福井市民が十年間使用できる分量といわれました。このダムによって下流へ土砂が流れ出るのを防ぎ、大雨のときは流れを調節して洪水を防ぐことができ、また干ばつのときは、貯めてある水を流して田畑をうるおすことができます。灌漑・治水・発電の三つを兼ねた多目的ダムでした。被害額年平均一億二千万円にものぼる災害を防ぎ、福井平野では、灌漑によって米五千七百トンが増産されるようになりました。中心となる発電所は、中島に設けられ、二つのダムによって最大一万八千キロワット（常時七千百キロワット）を発電します。

また、総合開発事業として、水没する上秋生・下秋生・小沢の三集落の人々の移住地として木本開拓地ができました。

木本原の開拓工事（旧『大野のあゆみ』より）

扇状地に田畑を　大野盆地も、長い年月の間にその大部分が開拓されていました。残っていた土地は水が得ら

れない雑木林で、付近の人たちが草かりや薪に使っていました。これらの土地は清滝川のつくった扇状地で、標高平均百八十五メートル、面積約三百五十ヘクタールほどで、川の流れがたびたび変化したために、小石や砂、土がまじり、その上に一メートルほどの火山灰がかぶっている傾斜地でした。このままでは水もれが激しく、また土地の性質が酸性であるため、何回も開田をこころみた人もありましたが成功しませんでした。開拓には、新鋭の機械をフルに使い、ブルドーザーによって根を抜いたり、地ならしをしました。水田をつくるために必要な水持ちや土の性質、品種の研究など近代の科学が集められ、用水路づくりや農家の配置、土地の配分などもされました。水没した西谷の人々が入植した千歳・榎集落もこの開拓によって誕生した村で、五箇地区の仏原とその枝村の葛原、下打波の枝村である湯上の人々もこの開拓田の配分を受けました。この開拓事業の特色は、

①灌漑用水は真名川から斜流分水工法によって取り入れた。

②用水路はコンクリートで水もれを防ぎ、清滝川はサイホンで横断するなど工

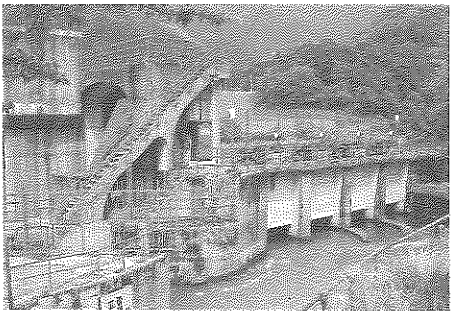
木本原開拓地（榎地区）

夫がなされた。

③特に水田の水もれを防ぐために、客土はブルドーザーのおさえ方によって調整した。

などで、アメリカのTVA開発のような、新しいやり方の開拓事業でした。

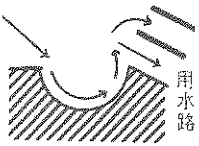
真名川用水の大改修　盆地の中心をなす旧大野町・下庄町・上庄村の地域にまたがる真名川用水の灌漑面積は、約千四十七ヘクタールにのぼりました。一九三〇年（昭和五）に、今までの水利組合を県営とし、一九五〇年（昭和二十五）県営事



真名川用水の取入口（五条方）

①斜流分水工法

用水の水を公平に分けるための方法。水が押し上げられて2つの用水に流れこむ。



②サイホン

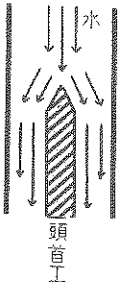
水を高いところから低いところへ移す方法。

③TVA開発

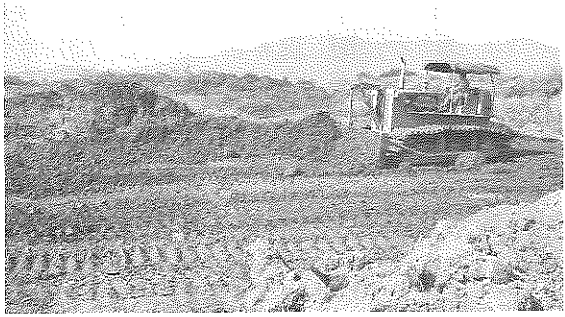
アメリカのテネシー川総合開発のこと。洪水を防ぎ、水運を良くし、耕地を広げ、電力をつくり、灌漑をおこなう大事業。

④合口頭首工

水を公平に分けるための方法。



業として認められ、二年間実地測量をしました。それから六年間、二億千九百万円の経費を使い、一九五八年（昭和三十三）にりっぱな施設が完成しました。この大改修によって二ヵ月は日照りが続いても大丈夫だといわれました。そのうえ、木本開拓地へ水を送り、余った分は富田発電所に送るという無駄のないやり方でした。



塚原野開拓でのブルドーザーの活躍
（昭和40年代）

昔の用水取入口はせき止めでしたが、これをやめて④合口頭首工という方法に改めました。これによって、水の配分が公平におこなわれるようになりました。改修の仕事には、組合関係者が日夜努力をおしまず働きました。

塚原野の開発　塚原野は、かつては「塚が千塚、道が千筋、狐が千疋」といわれた広い原野でした。国は、このような原野に満州事変後、農地開発営団をつくり、栗原野、新田野に内原の義勇軍訓練生や地方の諸団体を動員して事業に着手しました。その後戦争が激しくなるにつれて、資材や労力の不足から中止してしまい

ました。

戦争が終わると、食糧増産のため、一九四五年（昭和二十）八月から十一月まで、福井県立大野中学校の生徒が田野地籍で五ヘクタールの土地を開拓しました。中学生のつくった開拓地には、そばやさつまいもが植えられました。学業のかたわら、毎日五時間あまり開拓に汗を流したのです。やがて満州（中国東北部）や朝鮮からの引きあげ者、都市で家を焼かれた疎開者も増え、この人たちを収容するために国は入植地を指定し、受け入れ態勢を整えさせました。

大野では、最初に塚原開拓組合が結成されました。引きあげ者、疎開者合わせて六十四世帯、約七十ヘクタールの土地です。一戸あたりの平均一・五ヘクタールの土地に、慣れない開拓の鍬を振るいました。はだか一貫で始めた開拓民の苦労はなみたいていではありませんでした。開拓の初めのころは、食糧不足のおりから、じゃがいもやさつまいもづくりでも販路があったので生活はできました。し

行幸記念碑（昭和34年建立）（田野）

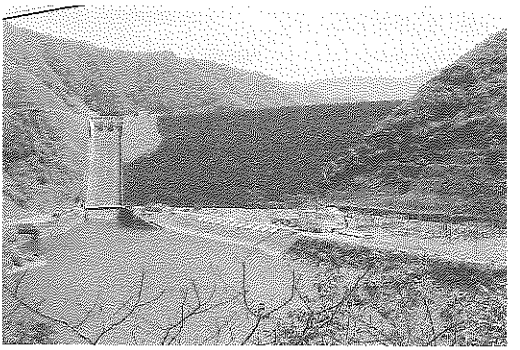
かし、このような経営は安定したものではなかったので、次に水田づくりにかかりました。この事業にはぼう大な経費がかかり、また用水の問題が解決できずに困難をきわめました。一九四九年（昭和二十四）ごろ、六百万円をかけてようやく下唯野地籍から開拓用水路ができたので、人々は希望を持つことができました。さらに、農協や県の指導により機械による開拓もすすめられ、六十ヘクタールを水田にしました。一九四七年（昭和二十二）十月二十五日には、開拓地の状況を視察するための天皇陛下の行幸が実現しました。

コンバインによる収穫
（旧『大野のあゆみ』より）

一九六四年（昭和三十九）からは、塚原総合開拓、パイロット事業と土地改良をかねて、七億七千万円あまりの事業費をつぎこんで、残っている原野約百四十ヘクタールを開墾し、すでに耕地となっていた百七十ヘクタールを、一枚三十アールの水田に改良する事業がおこされました。用水は、真名川から富田発電所へ水を送る導水路から分水門を設けて水田に流します。一方、九頭竜川開発計画の一環として、西勝原第三発電所から分水して塚原野一帯を水田化

する計画があり、完成後は、コンバイン・トラクターなどの大型機械を取り入れて労力をはぶき、畜産を取り入れました。一九六七年（昭和四十二）までに二百二十ヘクタールをつくりかえ、一九七一年（昭和四十六）に完成しました。長年の歳月と十四億円のお金を使った大事業が完成したのです。

平均一・二ヘクタールだった田が一・八ヘクタールに増え、八百トンの米の増産が見込まれたので、農民たちは大きな期待を持って完成を待っていました。関係している農家は、三百二十戸あまりで、中には和泉村から十七戸、西谷村から十四戸、その他十二戸が入植して新しい天地に生活を切り開いていきました。


九頭竜ダム（写真：和泉村役場提供）

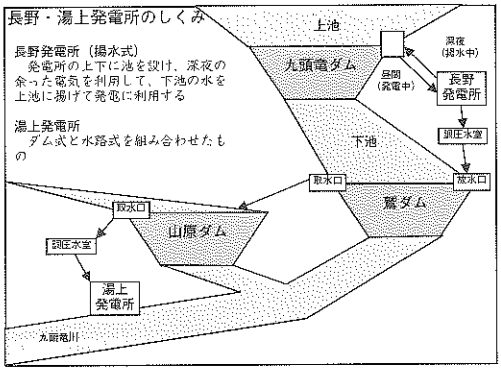
九頭竜川総合開発

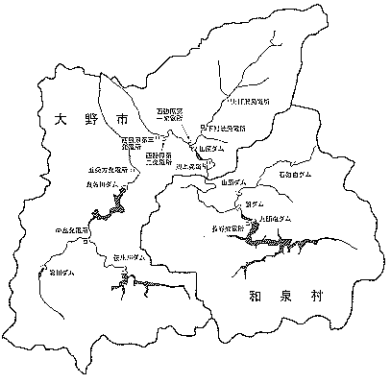
九頭竜川上流の上穴馬・下穴馬村（和泉村）では、電源開発工事が急ピッチですすめられました。長野ダム（現在は九頭竜ダム）を中心に七つのダムをつくり、九頭竜川や石徹白川の水を集めて、洪水の防止や発電などに利用しようというものでした。調査を含めて七年間の工事を終え、一九六七年（昭和四十二）十二月二日から貯水が始まり、一九六八

年（昭和四十三）六月から運転開始となりました。総出力三十二万二千キロワットで、年間の発生電力量は八億七千六百キロワットアワーと、福井県全体の発生電力量にあたりました。

長野・湯上・西勝原の三ヶ所に発電所がつくられ、長野と湯上の発電所は電源開発公社、西勝原第三発電所は北陸電力株式会社が受けもって工事をすすめました。

仏原・山原・三面・石徹白・智那洞などの大小七つのダムがつくられ、これらが結びついて大量に貯水されました。伊勢川・荷暮川・田茂谷・林谷など周辺の水は九頭竜ダムに集められました。石徹白川の上流では、三面・智那洞・石徹白の三取水ダムが建設され、この三ダムから導水路によって八キロメートル先の九頭竜ダムに水を送るという方法がとられました。九頭竜ダムの方式はロックフィ





おもなダムと発電所

（第二次大野市総合計画及び関係機関調べ）

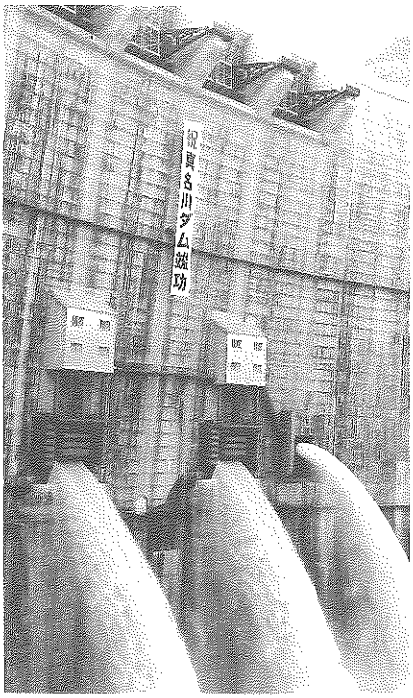
発電所名	所在地	事業者	出力（kW）		完成年次
			最大	常時	
西勝原第二	西勝原	北陸電力	7,200	780	大正８
西勝原第一	〃	〃	10,000	1,000	大正１２
東勝原	東勝原	〃	2,610	570	昭和１２
下打波	下打波	〃	4,500	1,320	昭和１４
五条方	五条方	〃	17,500	8,300	昭和２８
中島	中島	福井県	18,000	7,100	昭和３２
富田	下唯野	北陸電力	19,200	3,600	昭和３３
上打波	上打波	〃	10,200	1,700	昭和３３
西勝原第三	西勝原	〃	48,000	20,400	昭和４３
湯上	〃	電源開発	54,000	18,300	昭和４３
真名川	五条方	福井県	14,000	21,300	昭和４３
長野	長野	電源開発	220,000	8,000	昭和４３
中島第二	中島	福井県	1,400	320	平成４

大野・和泉の水力発電所

ルダム式といわれます。

発電方式も、揚水式発電という、一度使った水を夜間の余った電力を使って再び押し上げて、くり返し使う合理的な方法がとられました。湯上発電所で使った水は下流の仏原ダムに送られ、打波川の水と合わせて西勝原第三発電所で発電されます。

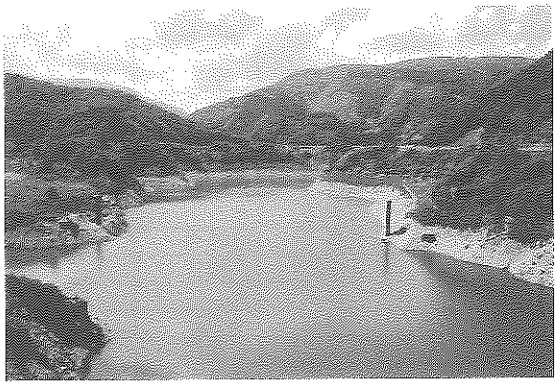
工事には三十トンダンプや七・五トンのパワ



真名川ダムの完成（昭和52年）

ーショベルカーが使われ、期間中に風水害がなかったこと、地質がよかったこと、速い運搬方法などが工事の進行をいっそう速めました。

わが国の発電事業は、最初は水力が主、火力が従でしたが、その後工事費が高くなって、火力が主、水力が従となりました。水力発電の場合は、どうしても難工事がつきまとい、工事費が高くなり、また補償費がかさむからです。しかし奥越電源開発の場合は、四百億円の巨費がかかりましたが、三十二万二千キロワットの大量電力を生み出したことに大きな効果がありました。一時は和泉村に工事のために三千五百人もの労務者がいて賑わいました。



麻那姫湖

水没戸数五百四十三戸というのも、日本ダム史上最高でした。水没に伴って、国道・県道は山の中腹につけかえられました。

谷間を結ぶコンクリート橋、山腹をぬうトンネル、延長二百六十六メートルという当時わが国二番目のつり橋など、ダム建設によって和泉の地域開発はすすみ

ました。

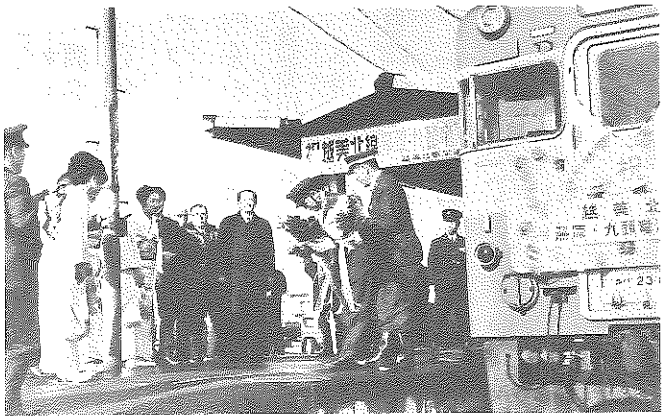
真名川防災ダムづくり　一九六五年（昭和四十）、西谷村は台風二十三号によって大きな被害を受けました。今後このような被害を防ぐため、真名川防災ダムがつくられました。一九六七年（昭和四十二）から着工し、総工費三百五十二億円をかけ、真名峡の銭亀につくられました。一九七六年（昭和五十一）九月に「真名川ダム」と命名され、翌年十月に完成しました。

水没したのは、下若生子・上若生子・西谷村（中島・上笹又・下笹又）など二百四十九戸（大野市六十七戸・西谷村百八十二戸）でした。笹生川ダム・九頭竜ダムをあわせた三つによって、雨量千ミリメートルになっても、下流では水害を防ぐことができるという大きな恵みがありました。

4　交通・通信の整備

交通の発達　日本が大戦の痛手から立ち直り、世界に類を見ない驚異的な経済発展を遂げた要因に、道路網や鉄道網の整備拡充・国産車の性能向上と大量生産・

高速交通体系の整備などをあげることができます。この交通の整備によって、人々の往来や物資の流通、いわゆる「ひと・もの・かね」の行き来が増大し、これらに伴って物質的にはとても恵まれた生活を送ることができるようになりました。特に昭和四十年代に社会現象となったモータリーゼーションの波は大野にも押し寄せ、交通機関に影響を与えたばかりか、生活様式にも大きな変化をもたらしました。



越美北線 勝原―九頭竜湖間の開通（昭和47年）

越美北線　一九六〇年（昭和三十五）十二月十五日、沿線住民や関係自治体待望の越美北線が、福井―大野―勝原間に開通しました。当日は奇跡的な好天に恵まれ、市内各駅には多数の市民が駆けつけ、その開通を喜びました。この宿願がかなうまでには、四十年近い歳月を必要としました。

もともと越美北線は、油坂峠を経由して中京方面と北陸方面を結ぶ路線として計画されていました。一九二三年（大正十二）には、すでに敷設さ

れていた越美南線との接続をめざして岐阜県北濃までの測量に着手しましたが、着工までにはいたりませんでした。一九三四年（昭和九年）には、関係自治体によって越美北線敷設促進期成同盟会が組織され、翌年には一億五百万円余りの予算が計上されました。ところが、一九三七年（昭和十二）の日中戦争の勃発による資材と労力の不足から、路床工事が完成した一九三八年（昭和十三）末に工事は中止されてしまい、太平洋戦争の激化によって工事の完成をみることができませんでした。

しかし、住民の全線開通への願いは強く、一九五〇年（昭和二十五）には小幡治和福井県知事を会長とする越美北線開通促進期成同盟会が発足しました。当時の県選出国会議員や県議会議員が一丸となって運動を盛り上げ着工寸前までこぎつけましたが、衆議院の解散により頓挫しました。ようやく一九五六年（昭和三十一）になって国鉄岐阜工事局によって工事が始められ、工費約十八億円を要して、福井―大野―勝原間約四十五キロメートルが完成したのです。福井方面への通勤通学者の足として、また貨物輸送による地域の産業を支える足として、大きな期待が寄せられました。

一九七二年（昭和四十七）十二月十五日には、勝原―九頭竜湖（和泉村朝日）

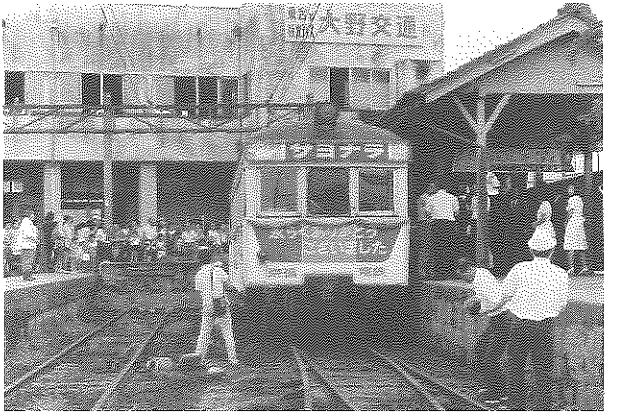
間が開通し、越美南線との接続に期待がかかりましたが、巨額の赤字に悩む国鉄には、ローカル線を建設する余裕がありませんでした。そればかりか、巨額の赤字をかかえた国鉄は採算の取れないローカル線を廃線とする方針を打ち出しました。越美北線も昭和五十年代半ばには廃線候補路線にあげられてしまいましたが、冬期間の住民の足として欠かすことができないとの理由で廃線を免れました。

一九八七年（昭和六十二）四月一日に国鉄はＪＲ各社に分割・民営化され、越美北線はＪＲ西日本が経営する路線となりました。ＪＲ西日本では機構改革などによる経営の合理化をすすめ、あわせてサービス向上にも力を入れていて、一九九二年（平成四）五月三日からは新型車両を導入するなど、サービスの充実に努めています。現在、一日平均九百人が利用する重要な交通機関となっています。

京福電鉄　終戦後から高度経済成長期まで、県都福井と大野を結ぶ大動脈として活躍したのが京福電気鉄道越前本線でした。旅客の輸送だけではなく貨物の輸送においても大きな役割を果たし、大野の産業を支える路線として活躍しました。大野からは中竜鉱山産出の亜鉛原石や米が搬出され、福井からは資材が搬入されました。その集積場所となったのは大野口駅で、今の下庄公民館あたりに広い敷地を持っていました。

一九五五年（昭和三十）十月一日には、大野市の要望によって「大野三番駅」の名称が「京福大野駅」に変更されました。また、翌年には京福大野駅の木造駅舎が、傍系の京福マートが入る駅ビルに新築されるなど、文字どおり大野の表玄関として地域の発展に寄与しました。

しかし、昭和四十年代に入ると急激なモータリゼーションの波が全国の地方私鉄の経営を直撃しました。乗客の減少のため県内でもいくつかの路線が廃線となりました。京福電鉄越前本線も例外ではなく、京福大野―勝山間の乗客数が徐々に減少していきました。さらに越美北線の開通がこの状況に拍車をかけました。京福電鉄ではさまざまな合理化策を実行しましたが、一九七四年（昭和四十九）八月一日に京福大野―勝山間が廃線となり、バス輸送に切りかわりました。時代とともに大野の産業を支えてきた六十年余りの歴史に幕を下ろしたのです。



京福電車　大野―勝山間の廃線（昭和49年）

現在、路線跡のほとんどは歩道となっていますが、下荒井トンネル跡や下荒井山腹の旧軌道跡など随所に往時を偲ぶことができます。

道路の整備　大野のような地方都市にとって、戦後の著しい生活の向上は、自家用車の普及と道路の整備によってもたらされたといっても過言ではありません。

大野市では市制発足直後から、道路の改修・新設や、橋梁の建設などを重点施策としてあげ、年次計画に基づいて整備をすすめてきました。真名川総合開発や奥越電源開発、真名川ダム建設など、国や県の大型プロジェクトが相次いだこともインフラストラクチャー（生活や産業の発展の基礎となる基本的施設）整備を一層すすめることになりました。

旧市街地の一番通りから五番通りには、街路の中央に用水がありました。城下町の風情をとどめるこの用水は、上水として利用されるほかに、防火や消雪などにも利用されていました。しかし、自動車の通行の支障になったことから、一九四〇

路線バス

年（昭和十五）の三番通りをかわきりに、この用水路を側溝（暗きょ）にする工事がおこなわれ、街路の拡幅がはかられました。昭和四十年代からは六間通りの拡幅、石灯籠通りの整備、三番通りの拡幅や延伸など街路の整備がすすみ、あわせて道路舗装も実施されていきました。また、旧市街地周辺の都市計画が着実にすすめられたことも、道路の整備をうながしました。昭和三十年代に計画された駅東地区の土地区画整理をはじめとして、陽明中学校・開成中学校の開校、校舎移転などに伴う都市計画、東中や神明地係の南部第二地区など、幅員の広い道路が整備されました。

郊外では、大野盆地を循環するような広域農道が建設されたり、集落と集落を結ぶ道路が改修されたり、区画整理によって農道が改修されたりしました。集落内の道路も拡幅・舗装され、車社会に対応しています。

一方、自家用車の普及と免許人口の増加は路線バスの経営を圧迫しました。国鉄（ＪＲ）・京福電鉄・大野観光社など各社がいくつもの路線に乗合バスを運行していましたが、今では路線数も減り便数も減っています。公共交通機関は子どもや高齢者など交通弱者を助けるものとして欠かせませんが、採算性とどう折り合いをつけていくかが今後の課題です。

通信の発達　戦後、電話の加入件数の増加はめざましく、全国どこへでも待たずにつながる電話を目標に、計画を立てて着々と工事がすすめられました。一九五二年（昭和二十七）、日本電信電話公社が発足し、一九六五年（昭和四十）十月には、長らく待ち望んでいた自動化が完成しました。各地とダイヤルするとすぐに話ができるようになり、たいへん便利になりました。

電報は、一九四九年（昭和二十四）から従来の手書式からタイプライター式に改められ、さらに一九五六年（昭和三十一）からは、モールス信号をやめて印刷電信機による通信になりました。北陸地方は全国でも早く自動化に改善されました。利用数も年とともに増え、一九五九年（昭和三十四）には月平均五千三百通の取り扱いをし、一九六四年（昭和三十九）には飛躍的にのびて、月平均八千八百通になりました。

一九六一年（昭和三十六）には五番通り（元町）に鉄筋の局舎が新築され、大野地方の通信の要として、その役割を果たしました。

5　災害をのりこえて

伊勢湾台風　戦後、大野ではあまり大きな災害はありませんでした。しかし、一九五九年（昭和三十四）に伊勢湾台風があり、和泉村大谷では、雨量が二時間で百四ミリにも達しました。九頭竜川がはん濫して堤防が壊され、多くの水田が流失したり埋まったりしました。また、家が倒壊したり浸水したりして三百四十七軒が被害を受けました。

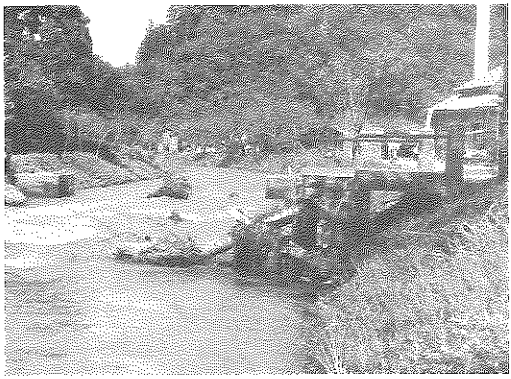
北美濃地震　一九六一年（昭和三十六）八月十九日、突然おこった地震（震度四）がありました。被害を受けたのは打波川とその支流でした。場所が山間へき地だったので、被害の様子はあまり知られていません。地震で打波の山々は様相を一変させ、願教寺山などは山肌が赤くはげ、一木一草すら残っていない状況に

伊勢湾台風の被害（六間通り）

北美濃地震の被害（上打波）

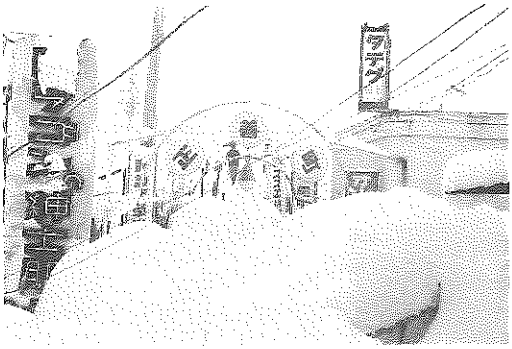
なりました。今もってその傷跡は回復していません。

第二室戸台風　北美濃地震がおきた翌月十六日、第二室戸台風が襲い、大洪水になりました。洪水で川床が二十メートルも高くなったところもあり、ものすごい土砂の量となりました。この大量の土砂が本流に流れると、大野市をはじめ福井平野に被害を及ぼす恐れがあるので、県では工事費約三十一億円をかけ、翌年からえん堤・堤防・道路工事、橋の付けかえ工事をしました。



第二室戸台風の被害（清滝橋）

三十八年豪雪　一九六三年（昭和三十八）、正月から降り続いた雪は止むことなく積もり、最深積雪三百六センチメートルを記録しました。この間交通機関も不通となり、約一ヵ月の間陸の孤島となってしまい、野菜・石油なども不足しました。市では自衛隊の応援

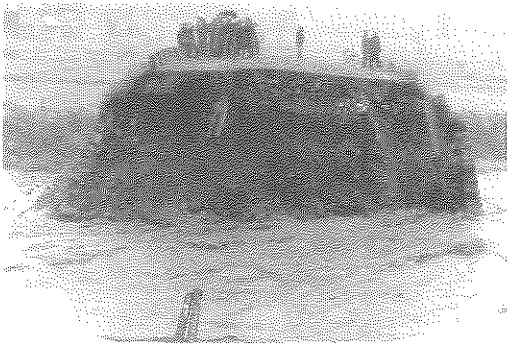


38年豪雪

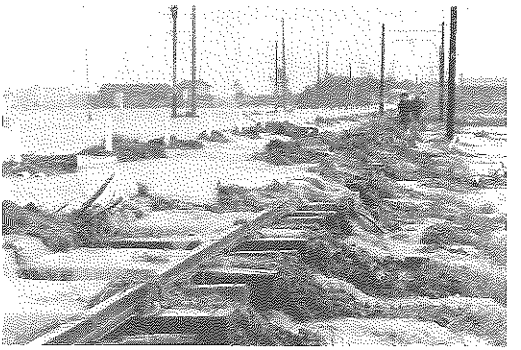
を頼み、道路の除雪に出動してもらいました。

越美北線は、自衛隊二百五十人、市の職員と民間人約千人、ロータリー車二台とラッセル車で三メートルを超える雪を除き、二月十三日に福井―大野間がようやく開通しました。大野から勝原まで開通したのは三月四日でした。京福電鉄越前本線の開通も二月十三日でした。

また、山間部の孤立した村々にはヘリコプターで物資を輸送しました。このような大雪は百年に一度だといわれています。



40.9風水害の被害（君が代橋）



40.9風水害の被害（京福線　新在家）

四〇・九風水害　一九六五年（昭和四十）九月十日に襲った台風二十三号は、瞬間風速四十二・五メートルを記録しました。この台風で富田小学校の木造校舎は倒壊しました。続いて海上にあった秋雨前線が北上

し、本州に停滞してほとんど動かず、十四日・十五日に奥越地方に集中豪雨をもたらしました。西谷村では、十四日午後七時ごろには滝のような豪雨に襲われ、両日の雨量が千ミリを突破しました。

中島集落で合流する笹生川・雲川・鎌谷川・こわ谷川などが氾濫し、土石流がおきて家屋が倒壊したり埋没したり、下流に押し流されたりしました。中島・上笹又で百九十四世帯が流失、百一世帯が埋没し、そのほかにも大きな被害を与えました。

下流の上若生子・下若生子も道路や橋が崩壊し、佐開でも民家八戸が土砂で埋まり、市内いたるところで田畑などが被害を受けました。この豪雨で二名の人が亡くなりました。

県では十五日に大野市・西谷村に対して災害救助法を発令し、ろうそくや米などの物資をヘリコプターで空輸させました。十六日には自衛隊や県警機動隊が救助にあたりました。このように自衛隊に支援を受けている中、十七日に三重苦ともいうべき台風二十四号が県下全域に猛威をふるい大被害を与えました。

五十六年豪雪　一九八〇年（昭和五十五）十二月二十六日から強い寒気団が南下し、年末から年始にかけて雪が降り続き、最深積雪二百六十四センチメートル

を記録しました。市では豪雪対策本部を設けて自衛隊の派遣を要請しました。市民、自衛隊四百三十八人が一体となって除雪しましたが、多くの被害に見舞われました。

被害は、家屋などの倒壊十六棟・死者二人・重傷者十二人（和泉村含む）にもなりました。その他にガス漏れ事故、床上・床下浸水、倒木などの被害が相次ぎました。越美北線は十二月二十八日から一月三十一日まで不通となり、二月一日からようやく開通しました。

56年の豪雪

市内の小中学校も、冬休みが明けても三学期の始業式をすることができず休校になり、十六日にようやく始業式をすることができました。

（1月20日現在）

	使った日数（日）	のべ台数（台）
市保有除雪車	32	140
自衛隊除雪車	11	176
自衛隊排雪車	11	302
借り上げ除雪車	30	1,600
借り上げ排雪車	16	560
計	100	2,778

56年豪雪　除・排雪車の活動状況

6　教育の改革と充実

戦後の教育　一九四六年（昭和二十一）、アメリカの教育使節団が、日本の教育の様子を見てまわり、報告書を連合国軍総司令部に出しました。それからの数年間は司令部の厳しい取り締まりを受けながら教育がおこなわれることになりました。

先生たちの中には、特に戦争に協力した者と見なされて教職を辞めさせられる人もいました。また軍国主義の考えのもとになっていた修身・歴史・地理などの授業はなくなり、国語や算数でも戦争に関係した所は墨で消して使わなければなりませんでした。しばらくして新しい教科書も分けられましたが、今のようなものでなく新聞紙のような紙に書かれたもので、表紙もついていなかったそうです。

その他、ノートや鉛筆、画用紙など学習用具はどれも不足していて、勉強をするためにとても苦労をしました。それでも、戦争が終わり、これからの新しい日本は自分たちがつくるのだという気持ちで、みな一生懸命勉強をしたそうです。

福井へ進駐した連合軍は、大野市内の各学校を見てまわりました。視察の知らせを受けると、学校では戦争に関係したものは見えないところへ片づけたり、逆

に司令部から届いていた文書は見やすいところにはって、命令を守っている証拠を見せたりしました。

翌一九四七年（昭和二十二）四月からは、教育制度も新しくなり、義務教育は小・中学校合わせて九年間という、六・三制のしくみになりました。また、学校の名前も新しく改められたり、今では当たり前となっている男女共学で学んだりなど、今の教育のもとになる民主教育が始まったのです。

例えば、教育内容を「楽しくわかる」ものにするために、新しい教育方法が研究され、教室ではグループによる話し合いを多く取り入れた学習が盛んにおこなわれるようになりました。戦争中は軍国主義の影響を特に受けていた音楽や体育でも、のびのびとした子どもの表現を大切にする指導がおこなわれるようになりました。クラブ活動や児童会・生徒会活動も始められ、子どもたちの自主性が大切にされるようになったのです。

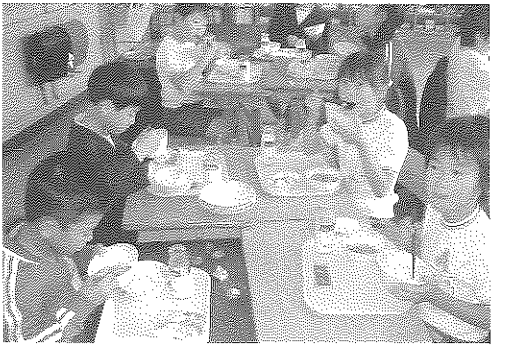
新しい校舎　その後、一九五四年（昭和二十九）より大野市制が始まってからは、校舎も次々と新しく建てかえられ、民主教育にふさわしい施設や設備が整えられていきました。校舎の新築や改築をきっかけに、学校の統廃合もすすみ、一九六二年（昭和三十七）には尚徳中学校が、一七七一年（昭和四十六）四月一

吉分校の廃止（昭和58年）

日には、有終・小山・下庄・乾側中学校を廃止して、開成・陽明中学校が発足し、一九七四年（昭和四十九）に陽明中学校校舎が、翌年には開成中学校校舎が完成しました。中には、有終東小学校のように新興住宅地として発展した駅東に、一九七八年（昭和五十三）新しく新設された学校もありました。一九八三年（昭和五十八）には、木本分校と吉分校（上庄小学校区）もなくなり、現在のように、小学校十二校・中学校四校となったのです。また、ども働きの家庭の増加や、核家族化の進展に伴う幼児教育の求めに応じて、それまで市街地にしかなかった幼い子どもたちを預かる施設も、一九六二年（昭和三十七）から、市立幼稚園として、上庄・阪谷・富田・小山・乾側地区に設けられました。数年後には、保育所や児童センターも設置され、現在、私立も含めて幼稚園八園・保育所十四所となっています。

学校給食　一九五三年（昭和二十八）から始まった学校給食は、初めのころ、

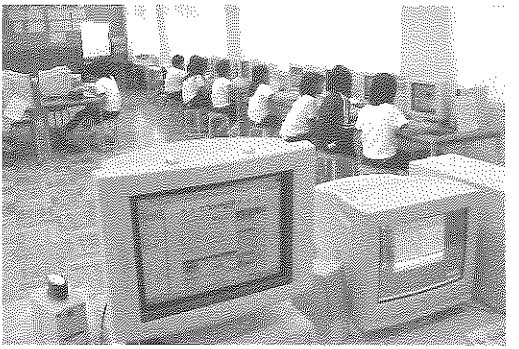
子どもたちの栄養不足を補う役割を果たしていました。しかし、栄養のとりすぎや偏った食生活が問題になっている今では、バランスの取れた食生活や栄養指導へとその役割がかわってきています。



給食のようす

新しい教育　戦争が終わり民主教育はすすみましたが、長い間、欧米に比べると一クラスの子どもの数が多くいました。そこで、一九八五年（昭和六十）から今のように一クラスが四十人を超えないようになりました。また、四十人近い低学年や高学年、中学校では、担任の先生を助ける先生をつけたり、少人数学級にしたりするなど、ひとりひとりの子どもを大切にする教育がおこなわれています。

一九九八年度（平成十）からは、市内全部の学校にコンピュータが設置され、これまでになかった新しい



コンピュータルーム

教育（情報教育）がおこなわれています。また、二〇〇二年度（平成十四）からは、「総合的な学習の時間」という新しい学習が始まり、自分が疑問に思ったことを、教室を出て調べ活動をしたり、いろいろな体験や活動を通してまとめ、話し合ったりするなど、子どもがすすんで学習する時間が設けられるようになっています。

大野高等学校　一九四八年（昭和二十三）四月、学制改革により、大野中学校・大野高等女学校・大野農林学校の三校を合併して、大野高等学校が誕生しました。小中学校と同じように男女共学になり、教育課程も新しく編成され、普通科・家庭科・商業科・農業科が設けられました。校歌は、詩人として有名な三好達治作で、幕末の大野藩のチャレンジ精神をイメージした向上心・向学心あふれるものとして歌い継がれています。

大野高等学校

一九六五年（昭和四十）、市内に工業系の学校が誕生したのをきっかけに、学科が再編され、その後二度の再編を経て、現在は普通科だけの編成となっています。伝統的に生徒会や部活動が盛んですが、

普通科だけの学科になってからは、一段と上級学校への進学率が高くなっています。

一九九三年（平成五）に、校舎が古くなったため、それまで亀山のふもとにあったのが国道一五八号のバイパス沿いに新築移転されました。また、二〇〇四年度（平成十六）から学校群制度がなくなり、生徒の受験高校の選択幅が広がることを見通して、今まで以上に魅力ある学校にしようと努力がなされています。

水本女学校

水本女学校の創立　県内でも有数の私立学校である水本女学校は、一九〇二年（明治三十五）に水本ふさにより創設されました。ふさは、渡辺女学校（現東京家政大学）に学び、卒業して郷里に帰ると、女子教育の遅れを痛感しました。そして、女子教育は、良妻賢母の健全な家庭をつくることが最大の根本であると考え、裁縫理論・技術向上をはかる一方で、和儀作法のしつけや一般教養（国語・数学・地理・歴史）の専門教師を招き、情操豊かな家庭婦人を育

てることを念頭に、幾多の困難を乗り越え教育に専念しました。

明治時代は教育に対する関心も低く、特に女子教育に関しては認識が極めて乏しい状況でした。そのため、婦人会を結成して社会教育活動したり、幼稚園の設立、託児所の開設をするなど、女性の教養を高めるためのさまざまな啓発活動をおこないました。

一九一七年（大正六）に現在の二番通りに校舎を新築し、その後も増築して設備を充実させました。一九三八年（昭和十三）には天皇陛下に拝謁し恩賜の木盃を受けました。

その後、水本学園高等学校として、本科（中学卒三ヶ年）、専攻科（高校卒）を設け、生徒二百名余りに、一般教養のほか女子に必要な被服・家庭科などを学ばせ、高度な教養が身につくよう努力しています。

二〇〇二年（平成十四）、多くの卒業生の努力で女子校創立百周年記念行事が盛大におこなわれ、記念碑も建てられました。

大野東高等学校　昭和三十年代にはいると、日本経済は工業を中心に飛躍的に成長を始めるようになり、それに伴って、工業教育の必要性が叫ばれるようになりました。そのような中、一九六五年（昭和四十）、奥越でただ一つの工業高校

として、大野工業高等学校が誕生したのです。初めのころ、学科は、「電機・機械・土木」で編成されたため、入学者のほとんどは男子生徒でしたが、その後、一九九一年（平成三）に、校名を大野東高校と改め、新しく福祉教養科を設置したことや、社会的に女子の職業選択希望の幅が増えたこともあって、今では女子生徒も百二十五名ほどが在学しています。学科は現在、機械システム科・電気科・情報建設科・福祉教養科の四つで編成され、新しい時代にあった職業教育がおこなわれています。

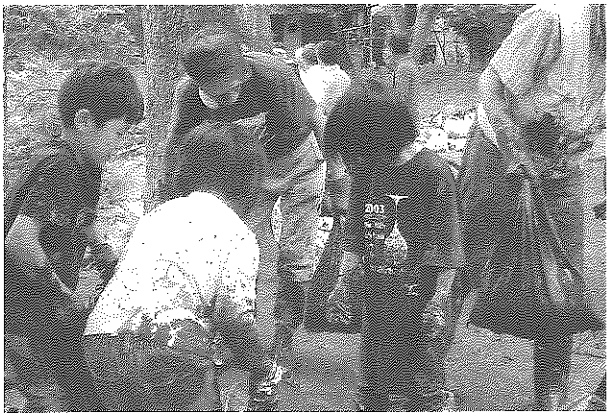
大野東高等学校

校訓は「誠実・協調・創意」で、特に男子生徒を中心に運動系の部活動が盛んで県下でも優秀な成績をおさめています。

かつての卒業生のほとんどは、身につけた技術を生かして社会人となっていきましたが、現在では、さらに上級の技術や教養を身につけようと専門学校や大学に進学する生徒が全体の半数にもなっています。そのため学校では、生徒の希望

を大切にしようと、学習指導や進路指導に力を入れる努力がなされています。

教育改革　六・三制が始まって五十年余りの間に、日本の経済は全世界の人々が驚くほど飛躍的な成長を遂げました。その成長を支えたもののひとつに戦後の民主教育もありましたが、経済の成長がゆるやかになり、日本社会のいろいろな問題点が見えてくる中で、教育にもたくさんの課題があることがわかってきました。



地域の人たちと柳廼社の池掃除

例えば、ものが豊かになり、なに不自由なく手に入る生活ができるようになった反面、子どもたちには、がまんや、ねばり強くがんばる気持ちが足りなくなってきました。また、室内でコンピュータゲームやテレビ・ビデオを見て遊ぶことが多くなり、かつてのように、外遊びをしながら友だちとのやりとりの中で心や体をたくましく鍛える経験が少なくなってきたのです。

一方で二十一世紀は、国際競争の時代といわれ、いろいろな面で困難が予想される時代を迎えてい

総合的な学習の時間での朝市調査

ます。このような時代を生きぬくために、これからの子どもたちには、今まで以上に「自分で考え、自分で問題を解決(かいけつ)していく力」を育てる必要があります。